

「薄雲」巻の乳母歌について―『伊勢集』の影響を考える

鈴木  
さやか

## 【論文】

## 「薄雲」巻の乳母歌について―『伊勢集』の影響を考える

鈴木 さやか

## はじめに

本論文の目的は、『源氏物語』『薄雲』巻における明石の姫君の乳母（以下、単に「乳母」と呼ぶ）の和歌「雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは」およびその前後の情景描写が、『伊勢集』の影響を受けて成っていることを指摘するところにある。またそのうえで、明石の君という人物が歌人伊勢の面影を宿していること、さらには、伊勢の歌を媒介に「天女」になぞらえられるものとして描かれていることを明らかにしていきたい。

稿者はここ数年『源氏物語』を題材とした授業を行っている。テキストを精読し、受講生から提出される疑問を皆で考えていくスタイルを取っており、受講生の鋭い質問によって、稿者が漫然と読み流していた本文の問題点に気づかされることも少なくない。二〇二一年度は「松風」「薄雲」の両巻を扱ったが、その際に受講生から出された一つの問いが、本論文の考察の出発点となっている。稿者は以前にも『源氏物語』『明石』巻を読む」の授業内で出された問いをきっかけに「明石の君」と琴、霧、そして衣との関連を整理し、「明石」巻に見られる源氏と明石の君の関係が、王統を担う者と天女との恋物語、いわゆる「天人女房譚」をモチーフとして成り立っていることを考察した注<sup>1</sup>。本論文はその続編に位置するものである。

なお、論文内の『源氏物語』の本文および現代語訳は、『新編日本古典文学全集 源氏物語②』（阿部秋生他校注、小学館、一九九五年）に拠っている。

## 明石の君と乳母の和歌の贈答

まず、本論文で問題とする乳母の和歌が詠まれるまでの物語の流れを一通り押さえておく。

源氏三一歳の秋。二条東院が落成した後、源氏は東の対に明石母子を迎え入れるべくたびたび明石の君に催促の文を送るが、身の程を思う明石の君は上京の決心がつかない。明石の入道はそんな娘のために、明石の尼君の祖父・中務宮が大堰川の手前に領有していた邸を修築し、そこに娘たちを住まわせることにした。ただ一人明石に留まる入道との別れを惜しみつつ、明石の君は母尼君、明石の姫君、乳母とともに上京し、大堰の邸に落ち着く。明石の浦とよく似た風情の大堰の邸の景色に、明石の君は感懐を禁じ得なかった。

源氏は紫の上を憚ってなかなか大堰を訪問できずにいたが、造宮中の嵯峨野の御堂やその近くにある桂の別荘への用事を口実のようにやく大堰に赴き、明石の君との三年ぶりの再会を果たす。明石の姫君は三歳になっていた。初めて会う娘の可愛らしさに源氏はますます二条院への引き取りの希望を強くする。

大堰で二夜を過ごした後、自邸に帰ろうとする源氏の許に、源氏来訪を聴きつけ京から殿上人が参集する。殿上人たちが饗応するために別邸の桂の院に向かおうとする源氏を、乳母は姫君を抱いて見送り、物思いの余り立って見送りに出られない明石の君の意を代弁し、源氏と明石の君との間を取り持つ。源氏は月明りのもと、桂の院で殿上人たちと遊宴を催し、京の帝とも和歌を贈答する。帰京した源氏は、不機嫌な紫の上をなだめつつ、二条院に姫君を引き取り、紫の上にその養育を任せる相談をする。冬になり、大堰の邸はいよいよ寂寥が募る。たびたびの入京の誘いにも応じようとしないう明石の君に、源氏は明石の姫君だけを二条院に引き取ることを提案する。明石の君は姫君との別れを思い動揺するが、母尼君の理性的な助言もあり、ついに姫君を手放すことを決心する。

明石の君は姫君との別れはもろろんのこと、姫君について二条院へ移る乳母との別れを泣き悲しむ。明石の姫君誕生の折に源氏から遣わされた乳母は、父は宮内庁長官と参議を兼任した上達部、母は故桐壺院の宣旨を務めた女房であり、由緒正しい貴族の娘で、気位も才気も持ち合わせ、明石の君にとっては、「明け暮れのもの思はしき、つれづれをもうち語らひて慰め馴らひつる」〔薄雲〕巻)唯一無二の存在であった。乳母も明石の君の嘆きに応え、明石の君の「年ごろの御心ばへ」が忘れがたく、離ればその「御心ばへ」が「恋しう」思ひ出されるだろうとし、「うち絶えきこゆることはよもはべらじ。つひには」と再会を期し明石の君を慰めつつも、たとえしばらくの間であっても明石の君と離れ、二条院に奉公するのがつらいと「うち泣きつつ」

過ごすのであった。

以上の概要から、乳母が明石の姫君誕生の折から明石の君と運命をともししていること、姫君の養育の他、明石の君と源氏との仲を和らげる役割を果たしていること、また明石の君と乳母の間に、別れに際して互いに悲しみの涙を流すような温かい心の通い合い、また信頼関係が生まれていることが見て取れるだろう注<sup>2</sup>。十二月の雪深い日の朝、姫君を手放す決心をした明石の君は、庭の遣水の水際に張った氷を眺めつつ乳母に歌を詠みかける。問題の乳母の歌は、その明石の君の歌に応える形で詠まれた。当該箇所を本文と訳にて示す。

落つる涙をかき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪ふかみみ山の道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして

とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは

(こぼれる涙を払って、「これから先、このような日には、なおさらのこと、どんなに頼りない心地がするでしょう」と、いかにもいたわしく嘆息して、

雪ふかみ……(雪の深いこの山道は晴れ間がなくても、やはり途絶えることなくお便りをお寄せください)

とおっしゃると、乳母は泣いて、

雪間なき……(たとえ雪の晴れ間もない吉野の奥山を捜しても、心を通わせる跡の途絶えることがありますようか)

と言いつつ慰めている。)

雪深い大堰への道がたとえ閉ざされようとも、せめて文だけは通わせてほしい、生身での再会はかなわなくとも、文という形だけでもつなかりを絶やさずについてほしいと訴える明石の君に対し、たとえ雪の晴れ間もない吉野にあなた様がいたとしても、決して心の通い合いは途絶えはしないと返す乳母の歌は、真情に溢れ、明石の君と乳母との緊密な心の結びつきを感じさせる。

## 諸訳・諸注の比較

稿者は先に述べた講義でこの和歌の贈答を紹介する際、この場面にいたるまでの両者の立場や心が通い合うまでの経緯を述べた後、乳母の歌は『古今和歌集』雑下・誹諧歌「もろこしの吉野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに」が本歌となっていると解説した。それに対し、二人の受講生から疑問の声が上がった。その二人の疑問を要約すると、「乳母との別れを惜しむ切実な明石の君の歌に対し、乳母が「もろこし」、中国の吉野山にだってついていきますよ、と大袈裟に表現する「誹諧歌」を念頭に置いて返歌をしたという解釈は妥当なのか。この歌によらずとも、『古今和歌集』以来、「雪深い地」として和歌に詠まれてきた「吉野」の地を想起して歌を詠むことは可能なのではないか」ということであった。一、三の注釈書を参照して事足りりとしていた稿者には、この問いに十分に答え得るだけの調査も心意もなかった。そこで遅ればせながらこの疑問に答えるため、諸訳・諸訳を比較検討していく中で、新たな見解を持つにいたった。結論を先取りすると、その見解とは「当該の乳母の歌は、『古今和歌集』ではなく、『伊勢集』の和歌、しかも物語性が強いために「伊勢日記」とも別称される、『伊勢集』冒頭の藤原仲平と伊勢との贈答歌を踏まえて詠まれた可能性が高い」ということである。

もっとも、乳母の当該歌の本歌として、『伊勢集』の歌を挙げた例はこれまでになかったわけではない。試みに井伊春樹編『源氏物語引歌索引』（笠間書院、一九七七年）を紐解くと、

・ゆきまなきよしのゝの山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに（古今集卷十九、雑体、誹諧、一〇四九、題しらず 左のおほいまうち君・伊勢集、一八一〇八、男返し）〔弄〕〔二〕〔細〕〔休〕〔岷〕〔上句のみ〕、〔紹〕〔湖〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

とあり、当該歌の引歌として、『古今和歌集』の「左のおほいまうち君（藤原時平）」と『伊勢集』の「男（藤原仲平）」の歌が併記されている。

次に、「雪間なき」歌の本歌に言及している古注釈書と現代の注釈書の二、三を代表で挙げてみると、早いものでは一五世紀末に成立した『一葉抄』（藤原正存著）に

・雪まなきよしのゝの山を 雪ふかきよしのゝ山なりとも尋かよはむと也唐のよしのゝの山にこもるともの歌などの類なり

とある。こちらは上の句のみの提示であるため、『古今和歌集』『伊勢集』『源氏物語新釈』いずれを引いたものか決し難い。一六世紀初めに成立した『弄花抄』（三條西実隆著）『細流抄』（三條西公条著）も同じく上の句のみを紹介する。他方、一六世紀初めに成立した『休聞抄』（里村昌休著）には

・雪間なき歌 雪ふかき吉野山なりとも尋かよはんと也 唐のよし野の山に籠るともの歌などの類也弄  
唐の芳野の山にこもるともをくん（原文ママ）と思ふ我ならなくに 下の句は此歌の心にてよめり

とあり、『古今和歌集』歌を本歌としていことがわかる。一六世紀後半成立の『紹巴抄』（里村紹巴著）『源氏物語孟津抄』（九条植通著）、一七世紀成立『源氏物語湖月抄』、一八世紀成立『源氏物語新釈』（賀茂真淵著）、いずれも先学に抛りつつ『古今和歌集』歌を本歌に挙げており、近世までの注釈書で『伊勢集』歌に言及しているものは見られなかった。

戦後の注釈書も基本的には古注釈に倣い、

・雪のはれ間のない吉野の山を御尋ねしても、私の心の通って行く足跡は、絶えましようか、絶えませぬ。「吉野山」は、深山と考えられて居たのである。「心のかよふあと」は、音信とか消息の意である。古今集誹諧歌にある「もろこしの吉野の山に籠るとも遅れんと思ふわれならなくに」の意味を込めている。（『日本古典文学大系』山岸徳平校注、岩波書店、一九五九年）

・『古今集』俳諧歌、「もろこしの芳野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに」へ中国での吉野山、人の通はぬ山と言われる吉野山のような山にあなたがおはいりになったとしても、そのあとを慕ってくっついてゆかないわたくしではありません。きつとわたくしは行きます。乳母の歌はこの『古今集』の歌の心をも含んでいる。（『源氏物語評釈』玉上琢彌、角川書店、一九六五年）

などと解説するが、その中で『新編日本古典文学全集』は、

・たとえ雪の晴れ間もない吉野の奥山を捜しても、心を通わせる跡の途絶えることがありまじょうか  
 頭注―「唐土（もろこし）の吉野の山にこもるとも遅れむと思ふ我ならなくに」（古今・雑躰 藤原時平、伊勢集では藤原仲平の詠）をふまえる。「心のかよふあと」は手紙の意。（『新編日本古典文学全集21 源氏物語②』 阿部秋生校注 小学館、一九九四年）

と、『伊勢集』にも同歌があること、ただし作者名が異なり、『古今和歌集』では藤原時平の詠とされるものが、『伊勢集』では時平の弟の仲平が詠んだ歌とされている点に言及している点が注目される。

以上見て来たとおり、乳母の歌の本歌については『古今和歌集』歌を挙げるものが大半であり、『伊勢集』の存在を指摘するものも、両者の作者名の違いを言うのみで、和歌そのものの違いについて言及しているものは見られなかった。しかし、いま秋山虔他『日本古典評釈・全注釈叢書 伊勢集全注釈』（角川書店、二〇一六年）で実際の『伊勢集』の仲平歌にあたり、「唐土（もろこし）の吉野の山に籠るとも思はむ人に我遅れめや」とあり、下の句に違いが見られる。「推量の助動詞の已然形+反語の助動詞」で強い否定を表す「めや」の使用という点で、『古今和歌集』よりも『伊勢集』に乳母の歌との親近性が見られることがうかがえるが、問題はそこには留まらない。『伊勢集』中の「もろこしの」の歌は、同歌集の冒頭部、すなわち詞書に見られる物語性の高さから「伊勢日記」と別称される部分に収録されており、その「伊勢日記」に描かれた伊勢の恋の物語を踏まえて乳母歌を詠み解くことで、明石の君の歌に対し、乳母が「吉野」を詠んだ理由が明らかになると稿者は考えるのである。そこで以下は、やや迂遠な考察となるが、歌人伊勢の歌が『源氏物語』、そして作者紫式部に深い影響を与えていること、明石の君という人物そのものが歌人伊勢の面影を負っていることを、先行研究に拠りながら確認し、そのうえで「伊勢日記」中の「吉野」という地に込められたイメージを探っていきたい。

### 歌人伊勢と紫式部

伊勢は九世紀末から十世紀前半を生きた、宇多・醍醐・朱雀朝を代表する歌人で、三十六歌仙の一人である。父は伊勢守、大和守を歴任した藤原継蔭で、伊勢は受領層の娘ということになる。十四五歳の頃、宇多天皇の女御である藤原基経女温子のもと

に出仕し、父の任国によって伊勢と呼ばれる。温子の兄である藤原仲平との恋の破局から一時期父の任国である大和に下った後、温子や兄時平の懇請があり再出仕、時平との恋愛等を経て宇多天皇の寵を得て皇子を生んだが皇子は夭折する。寛平九年（八九九）の宇多天皇の退位・落飾、延宝七年（九〇七）温子薨去の後、温子の遺児均子内親王に仕え、内親王の死後はその夫であり宇多天皇の皇子でもある敦慶親王の寵を受け、中務を生んだ。

歌人としての伊勢は、『古今和歌集』以下の勅撰集に一八四首入集し、ことに三代集では女流歌人ではもっとも多く歌が採られている。華麗な恋愛遍歴の中で詠まれた和歌も多いが、依頼されて屏風歌等を詠む専門歌人としての名も高く、後代には能因法師などに尊崇されたこと、『俊頼髓脳』に見える。

平安時代前期の代表的歌人である伊勢が『源氏物語』に与えた影響については数多くの研究がある。もっとも有名な『伊勢集』の受容としては、「桐壺」巻の「長恨歌の御絵」について述べる件りがある注<sup>3</sup>。亡き桐壺更衣を偲ぶ桐壺帝が『長恨歌』の物語を描いた絵を眺める場面で、

このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせ給ひて、伊勢、貫之に詠ませ給へる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、枕言にせさせ給ふ。

と、宇多上皇と伊勢、貫之を物語世界に近い時代の史実として語っているのである。そして、『伊勢集』には実際に宇多上皇の求めに応じて作られた『長恨歌』の屏風絵に、伊勢が玄宗皇帝の立場で詠んだ歌五首、楊貴妃の立場で詠んだ歌五首が収められている。伊勢の名は「総角」巻の冒頭部にも「伊勢の御」としてこちらも貫之の名とともに登場しており、伊勢が平安時代前期を代表する歌人として貫之と並び称せられていたことが窺える。また、『源氏物語事典』（春秋社刊）によれば、『源氏物語』に引かれた伊勢の歌は十八首（重複も含めると二十二首）で、貫之や業平を超えてもっとも多く引用されており、紫式部がいかに歌人伊勢に傾倒し、『伊勢集』を読み込んで自家葉籠中の物としていたかがわかる注<sup>4</sup>。なお、『源氏物語』のあまりにも有名な冒頭部分、「いづれの御時にか」が『伊勢物語』の冒頭「いづれの御時にかありけむ」の影響を受けてなったものであるという説もある。だが、『伊勢集』の伝本は異同が激しく、西本願寺系統の本文は同箇所が「寛平のみかどの御時」となっていることから、逆に『源氏物語』の冒頭が後世『伊勢集』の本文に流れ込み、改変を生んだという説もある。いづれにせよ、『伊勢集』そして歌人伊勢は、紫式部にとってもっとも手本とすべき歌人であり、贅（二〇一二）の言葉を借りれば「親近感」と「ライブ



ル心」とを同時に感じる相手でもあったといえよう注5。

### 伊勢の歌と明石の君

ここまで歌人伊勢が『源氏物語』に与えた影響の大きさを述べてきたが、ここではさらに、『源氏物語』の主要人物であり、「作者の自画像」注6をも見てとれるとされる明石の君に、伊勢の人生そのものが重ねられているとする説を紹介する。先に述べたように、伊勢は宇多天皇の寵を受け皇子を生むが皇子とは共に暮らさず、伊勢が仕えた温子自身は宇多天皇との間に均子内親王を設けるものの、皇子を産むことはなかった。田坂(一九九三)は、宇多天皇をめぐる伊勢と温子の関係が、源氏をめぐる明石の君と紫の上との関係に通じると指摘する注7。また、森野(二〇二三)は、「物語における明石の君の描かれ方を追っていくと、その所要所で伊勢の歌が引用されていることに気づかされてくる」としたうえで、以下の四点において、伊勢と明石の君との近似性を指摘する注8。すなわち、①「明石」巻において明石の君が源氏と初めて逢う場面で詠む「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきて語らむ」の歌が、伊勢の「あふことのあけぬ夜ながら明けぬれば我こそ帰れ心やはゆく」をもととしていること、②同じく「明石」巻で源氏が明石の君との将来を約し、再会までの形見として自分の琴を貸与したときの歌「逢ふまでのかたみに契る中の緒のしらべはことに変はらざらなむ」と、伊勢が琴を借りた相手に、この琴があなたと逢うまでの「形見だ」とした「逢ふことのかたみの声の高からばわが泣く声と人の聞かなむ」との表現が重なっていること、また伊勢と敦慶親王との間にも琴の貸借を巡る和歌の贈答があること、③源氏と殿上人による桂の遊宴の際、源氏が口ずさんだ「中に生ひたる」が、伊勢が宇多天皇の皇子を産み、桂にその皇子を置いて温子に仕えていた際に温子に宛てて詠んだ歌「ひさかたの中に生ひたる里なれば光をのみぞたのむべらなる」であること、④源氏が明石の君の居住地として準備していた「二条東院」が、温子崩御後伊勢が住んでいたとされる「二条東洞院」と重なること、の四点である。そのうえで、森野氏は伊勢の歩んだ足跡が物語上の明石の君の歩む行程を拘束し、源氏の子を生みつつも、その子と別れて生きなければならないという展開を導き出していること、そのうえで、明石の君が二条東院に入ること拒み続け、ついに六条院の住人になったことで「明石の君の生は歌人伊勢のくびきから解き放たれ、物語に固有のものとして自立することになる」と述べている。

稿者は、森野氏の「明石の君を描く際に、所要所で伊勢の歌が引用されている」という指摘に賛同する。そして、その指摘を踏まえたくて、その「要所」のひとつに、先に挙げた「薄雲」巻の雪の日の贈答を加えて考えてみたい。結論を先取りする

と、『伊勢集』冒頭の伊勢は「吉野」を巡る贈答歌および独詠歌によって「天女」の面影を負っており、その歌を引くことよって、「明石」「滯標」「松風」巻で積み重ねられてきた「明石の君」天女」の図式がより強められていると考えられるのである。

### 明石の君に重ねられる「天女」像

明石の君に天女の面影が重ねられている意味については、まず『源氏物語』全体に見られる「天人女房譚」の話型について押さえておく必要がある。天人女房譚とは白鳥処女説話とも羽衣説話とも呼ばれ、世界中にその話型の分布が見られる。水浴びをしていた天女が羽衣を人間の男性に隠され、その男と結婚して子を設けた後、羽衣を発見して昇天してしまうというモチーフをその典型とするが、天女昇天後の後日譚を付すものもあり、七夕説話などもそれに類する。話型生成の背景は様々な説明されるが、折口信夫は天の羽衣に天皇が物忌みの際につきる物忌衣にその原型を見、禊に奉仕する「水の女」が禊の終了時に己れのみ知る結び目を解くと、天皇は「変若返つて」神となりきるのだという注<sup>9</sup>。「水の女」は右にあるように、神が神となりきるための衣服を司り、神との性的関係を持つ「神の嫁」であった。高崎（一九七二）は「神の子」たる源氏を扶けるものとして紫の上が「山の水の女」、明石の君が「海の水の女」としての性格を持つことを指摘する注<sup>10</sup>。また、島内（一九八九）は天人女房譚を「古代文学の最も大きな話型の一つ」であり、その話型に属するものとして、『竹取物語』のかぐや姫の昇天や玄宗皇帝が幻士を遣わして霊界の楊貴妃と言葉を交わした『長恨歌』、源氏物語における藤壺の死、宇治十帖の大君、中の君、浮舟を挙げている。

『源氏物語』はその物語の初発から、王権を担う桐壺帝が桐壺更衣を失う嘆きが、玄宗皇帝が楊貴妃を失う『長恨歌』になぞらえる形で描き出されている。桐壺更衣との容貌の類似する藤壺が源氏のもとを去り、空蟬は薄衣を残して去り、夕顔は子を残して去っていく。そして、その夕顔の子たる玉鬘も、源氏が「恋ひわたる身はそれなれど玉かづらいかなるすぢを尋ね来つらむ」と詠んだように、天人女房譚において男が蔓をのぼって天の子どもに会いに行くように、「蔓」をたどって源氏に見出され、後には「竹取物語」になぞらえた求婚譚の中心となっていく。源氏の子として生きる薫もまた大君の死、浮舟の葬送に限りない痛恨と思慕を覚えることを想うと、天人女房譚は『源氏物語』全体の男女の関係を捉えるうえで非常に重要な話型であると言えるだろう。

明石の君も例外ではない。「はじめに」で述べたように、稿者は以前、「明石」巻における明石君には「天女」の面影が託され

ており、その面影は天女の好む「琴」、そして天女が身につける（あるいは王権を担う者のために用意する）「衣」の描写、また明石の君と並び描かれる「筑紫の五節」の描写によって形づくられていると主張した。明石の君と天女を結び付ける言説は、「明石」巻以後もくりかえし見られる。

まず「濔標」巻。明石の姫君誕生に際し、源氏が宣旨の女を乳母として遣わしたことは先に述べたとおりだが、その乳母に託し、源氏は明石の君に

いつしかも袖うちかけむをとめ子が世をへてなづる岩のおひさき

という歌を贈る。それに対し、明石の君が返した歌は、

ひとりしてなづるは袖のほどなきに覆ふばかりのかげをしぞまつ

であった。源氏が「君が世は天の羽衣まれにきて撫づとも尽きぬ巖ならなむ」（『拾遺和歌集』賀・読人しらす）等の歌をもとに、「天女が繰り返し撫でる岩（＝姫君）に、自分も早く袖をうちかけたい」すなわち自分の手許において姫君を庇護したい、というのに対し、明石の君は「ひとりで「撫でる」には自分の袖は狭すぎるので、あなたの袖の広大な庇護が待たれる」というのである。源氏と明石の君の歌の贈答を通して、改めて「明石の君＝天女」の図式が形成され、王権を担う〈神の子〉たる源氏と、その〈神の子〉に奉仕しつつその聖性を保証する天女との間に生まれた明石の姫君が特別な存在であることを示しているのである。

続いて、「松風」巻。源氏を頼って上京する明石母子に、明石入道は言葉をかける。明石のような田舎に覚悟を決めて下ってきたのも、ただあなた（明石の君）のためであった。あなたがだんだんと大人になってくるにつけ、どうしてこんな美しい人を田舎に隠しておかねばならないのかと気がふさいでいたが、仏神に頼みをかけ、「さりとてもかうつたなき身にひかれて山がつの庵にはまじりたまはじ」と思っていたところ、「若君（＝明石の姫君。鈴木注）のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしきに」、このような海辺で過ごさせることももったいなく、別れの悲しみに心は鎮め難いものの、この身はもう長いこと世を捨てた身であるので、悔いはないとする。ここに描かれるのは、明石母子の宿世の素晴らしさと、そこに縁あって山賤のような宿運拙き身

ながら共に過ごせたことのもったいなさと有難さである。この文脈に続けて、入道は次のように述べる。

君たちは世を照らしたまふべき光しるければ、しばしかかる山がつの心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ、天に生まるる人の、あやしき三つの途に帰るらむ一時に思ひなづらへて、今日長く別れたてまつりぬ。

この箇所については、天人が三つの途（地獄・餓鬼・畜生）で苦難の道を歩もうとも、それは一時のことではいつか天上界に戻れるように、「今の悲しい別れも一時的なもので、再び天上界に生れて逢う時もあるだろう」（『新編日本古典文学全集』）と解するものもあるが、それまでの文脈で自らを「山賤」にたとえていた入道が、自らを天人に例えることは考えにくい。ここは、『弄花抄』にある「天人のかりに此界などに来て又天にかへる事ありそのたとへ也（中略）入道ノムスメノ別ノ悲ノ事申歎云々」とある説、または与謝野晶子の「姫君は高い高い宿命の人でいられるが、暫時の間に祖父と孫の愛を作って見せてくださったのだ。天に生まれる人も一度は三途の川まで行くということにあたることだとそれを思っただけで私はこれだけ長いお別れをする。」という訳に従いたい。つまり、「天に生まるる人」は高い宿命を持つ明石の君・明石の姫君の「君たち」であり、ここでは明石母子がともに天女そのものとして捉えられているのである。

続いて、同じく「松風」巻で、明石の君が明石を発つ際に詠んだ歌、

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつうき木にのりてわれかへらん

を見ていきたい。この「うき木にのりて」の表現は、中国の「張騫乗槎説話」によるものであることが指摘されている。梁・宗懐『荆楚歳時記』七月七日条について、いま河野（二〇〇二）の説明を引くと、

漢の武帝が張騫を大夏に派遣し河原を尋ねさせた。張騫が槎に乗って行くと織女と牽牛に出会う。ここがどこかと尋ねると織女は搢（支）機石を与え嚴君平に問えと言う。帰還後、蜀に行き君平に問うと、某年某月、客星が牽牛星と織女星を犯したと言う。支機石のことは東方朔が知っていたというもので、客星つまり張騫は天の河の牽牛織女の所まで行ったことになっ

ている。

とある注<sup>12</sup>。河野(二〇〇二)はさらに日本においては『懐風藻』がまず張鸞乗様説話を取り入れ、ついで和歌の世界においては平安時代以降、「うき木にのる」という表現が類型化し、「浮き」が「憂き」に響き合うことで、「うき木にのる」とは特に男との関係に不安な時を過ごす女の心細さを表現する語としての意味が加えられてくると説明する。ここでは、明石の君が源氏の頼りない愛情にすがらざるを得ない、不安定な我が身を嘆くとともに、張鸞乗様説話に抛りつつ、明石から都へと戻することを張鸞とは逆のベクトル、すなわち天から地上に様に乗って戻っていくことを「われかへるらん」と表現しているとみたい。そのことは、明石の君の歌に先行する尼君の歌が「かの岸に心寄りにしあま舟のそむきしかたにこぎかへるかな」と、明石を彼岸に、都を「そむきし」此岸、俗世にたとえ、そこに「こぎかへる」と表現していることに対応していよう。

また、「松風」巻の巻末では、明石の君は源氏の月に二度の訪れを「年の渡りにはたちまさりぬべかめるを」、つまり牽牛と織女の逢瀬が年に一度であるよりはまりました、と自らに言い聞かせる。ここでも、明石の君は天女(織女)に自分を重ねており、「明石の君」天女の図式は作者自身が繰り返し引く中国の故事において形成されていると言ってよいだろう。なぜ、天界から俗世に戻ったはずの明石の君が、変わらず織女として牽牛になぞらえられた源氏と隔てられたものとして描き得るのか。それは、明石の住む「大堰」という場の特異性による。大堰の邸は、「あたりをかしうて、海づらに通ひたる」「年ごろ経つる海づらにおぼえたれば」(「松風」巻)と、大堰川のほとりにあり明石と重ねられる場所としてくりかえし描かれており、「都の近郊にありながらも明石の地を想起させるこの場所は、物語の中では都と明石との両者の世界を合わせもった両義的な世界」注<sup>13</sup>として描かれているからである。

ここまで、「浮標」「松風」巻と、明石の君が天女、ことに織女の面影を負う女性として造型されている箇所を見てきた。ここで天女たる明石の君が、自らの身のおきどころをどのように捉えているかをまとめると、都の人たる源氏には「知らぬ世界」(「明石」巻)とされた明石の地は、明石の君にとっては自らの拠って立つ場であり、いわば天界であった(尼君の歌でも、彼岸になぞらえられた明石から、「あま舟―海人舟・天舟」で都に向かうと表現されていることが注目される)。そして、移り住んだ先の「大堰」は、その天界たる明石と重ねられて描かれる場であり、地上界である都と川を隔ててある異境であった。では、その大堰の地にあつて、同じ宿命を背負ったものとして「君たち」と呼ばれていた娘を手放すことになる明石の君は、どのように描かれるのか。天人女房譚では、天女が地上界の男との間になした子と別れるのは、天女が天に帰る時である。すでに天界た

る明石と重ねられた大堰において、娘と別れる明石の君はどこへ行くのか。稿者は、そこで用いられたのが、神仙境たる「吉野」のイメージであったと考える。以下は、乳母歌「雪間なき吉野」の引歌になっていると思われる『伊勢集』の関連箇所を確認し、そこで「吉野」がどのような地として詠われているかを跡づけていく。

### 「伊勢日記」における「吉野」

先に述べたように、『伊勢集』の冒頭は長い詞書を持ち、歌物語的な要素を持つことから「伊勢日記」と称されることもあり、後の平安女流日記の嚆矢とも目されている。「日記」の概要は、年若い伊勢が宇多天皇の中宮温子のもとに出仕し、温子の兄藤原仲平と恋仲になるものの、仲平が権門の姫君の婿となるにおよんで関係が途絶える。初恋の男に捨てられた伊勢は深い挫折を味わい、一時親の任国である大和に里下がりする。その後時平や仲平、他の男たちと贈答をするものなびかず、温子の強い懇請により再出仕、思いがけず宇多天皇の寵を受け皇子を生む、というものである。この「伊勢日記」の部分は伊勢の実人生をそのまま反映したものではなく、伊勢自身が執筆したのではないという説もあるが、それでも「伊勢の波乱に富んだ半生が、この「伊勢日記」に凝縮している」とも言われる。その「伊勢日記」において、吉野の地を題材とした贈答歌、および独詠が三箇所あり、そのいずれもが吉野を仙境ととらえているため、以下はその三箇所を詳しく見ていこう。なお、『伊勢集』の引用および各歌に付した漢数字はすべて秋山虔他『日本古典評釈・全注釈叢書 伊勢集全注釈』（角川書店、二〇一六年）により、傍線は稿者による。

三 三輪の山いかに待ち見む年経とも訪ぬる人もあらじと思へば  
かく人の婿になりければ、今は訪はじと思ひて、ありし大和にしばしあらむと思ひて、かく言ひ遣りける

枇杷の大臣の御返し

四 唐土の吉野の山に籠るとも思はむ人に我遅れめや  
この歌の返し、男詠みて、奈良坂よりおこせける。

「かく人の婿になりければ」とは、伊勢の初めての恋人である仲平が、「大将（源能有とする説があるが、未詳）の婿」となったことを指す。「三輪の山」の和歌は、「我が庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる門」（『古今和歌集』雑）を踏まえたものであること、『古今和歌六帖』では三輪の明神の歌となっており、諸注指摘する通りである。本歌の「とぶらひ来ませ」によって男の訪れを待つ心を根底に潜ませつつ、本歌を反転させた「訪ぬる人もあらじと思へば」という措辞でもって、他の家の婿となり私を裏切ったあなたが、二度と私を訪れてこようとは思えない、私も、三輪山の和歌のように、「恋しくはとぶらひ来ませ」とはとても言えない、と諦めの気持ちを詠む。思い諦めるという内容でありながら、呼びかけるのは未練の証でもある。また、三輪明神とは違う、と言表しつつも、三輪山の歌を下敷きにするので、恋する相手を持つ伊勢の姿は三輪の神の神秘性をいかに帯びてくるだろう。

それに対して、「枇杷の大臣」、すなわち藤原仲平は、『源氏物語』乳母歌の本歌となった「唐土の」の歌を返すのである。仲平（『古今和歌集』では時平）が伊勢に愛情の深さを訴えるに、なぜ「唐土の吉野」と詠んだのか。たとえば『和歌童蒙抄』では、「たとへば吉野山に籠もらむは事もよろし、唐土ならむ吉野山なりとも遅れじと詠めるなり。さればこそ思ひも寄らぬ心あまりたるにより、誹諧歌には入りたれ」とあって、遠隔の地の表現として和歌でももちいられていた「唐土」と、隠遁の地として知られる「吉野山」を結び付け、思いもよらない程の遠さを大袈裟に表現しているところが「誹諧歌」―諧謔味のある歌の部立に入っている所以だ、とする。確かに当該の返歌には、「三輪山」の歌を下敷きにおとこへの恋情と恨みを詠んだ伊勢の歌に比べると、どこまでも相手を追いつめてゆく姿勢は見せつつも、舞台を「世をはかなみ、隠遁した者が籠る」吉野山に移し替えることで、相手の恋情や怨みをかわしていくような内容にも見てとれる。「この二首は、本来一対の贈答歌として詠まれたものではあるまい。「もろこしの吉野の山に」の歌はあるいは伊勢の大和下りに際して時平から伊勢へ贈られた歌かと思われ、それがいつか仲平の歌ということになって、このように一対の贈答歌として物語られたのではないか」という説が説かれるゆえである。ここでは、作者が仲平と時平のいずれであるかという論には立ち入らず、『伊勢集』の享受者である紫式部が、この和歌の贈答からどのようなイメージを受けとったのか、ということを考えていきたい。そこに注目したとき、浮かび上がって来るのは、「三輪の明神」のイメージを揺曳させ、大和に籠る伊勢と、その伊勢のあり場所を「唐土の」「吉野」と表現することで、「異境にいるものを慕う」男の図である。男の返歌が、都と大和の地の「境」となる「奈良坂」で詠まれていることも、女がいま籠っているところが男のいまいる場所とは異質なところであることを強調しているように。

ここで、「唐土の吉野」と言われる吉野の異界性について、より詳しく見ていきたい。吉野を神仙境とみなし、そこに遊ぶ境

地を描いたものに、『懐風藻』の「吉野詩」と呼ばれる詩群がある。善導寺(二〇一四)は吉野を詠んだ十七詩を対象に考察を加え、吉野詩作者たちが『文選』の何敬宗「遊仙詩」等に影響を受け、吉野の地勢や壬申の乱の舞台であった歴史的要素を踏まえ、吉野を神仙境と見做すようになった経緯を説明している。その吉野詩の筆頭にあるのが葛野王の「遊龍門」であることも興味深い。なぜなら、右の和歌の贈答のあと、伊勢が詣でるのが他ならぬ「龍門寺」であり、その地で仙人を思う歌を詠むからである。「遊龍門」の後半二句を書き下し文で示すと、「安にか王喬が道を得て、鶴を控きて蓬瀛に入らむ。」——どうかして王喬のような仙人の術を会得して、鶴に乗り蓬萊と瀛州という仙人の住む海中の山に入りたいものだ、とあり、龍門が仙境を想起させる場であったことが窺える。では続いて、その「龍門」で詠んだ伊勢の和歌を見ていこう。

大和に三月ばかりありけるに、龍門といふ寺に詣でたりけり。正月十一日ばかりなりけり。この寺のさまは、雲の中より滝はおつるやうに見ゆ、山の人の家といふは、いたう年経て、岩の上に苔八重むしたり。見知らぬ心地に、いと悲しう物のみあはれにおぼえて、涙は滝に劣らず。橋のもとにしばしあるに、いと暗くなりぬ、「雨や降らむとすらむ」、供なる人と言ふ。法師ばら「雪ぞ降らむ」と言ふほどに、いみじう大きな雪かき暗し降れば、人々「歌詠まむ」と言ふに、この詣でたる人

八 裁ち縫はぬ衣着し人もなきものを何山姫の布さらすらむ

と詠みたりければ、さらに異人詠まずなりにけり

龍門寺の「山の人の家」、仙人の庵の跡を眺め、悲しさとしみじみとした感興に「滝に劣ら」ぬ涙を流した伊勢は、折からの雪になぞらえて歌を詠む。一首の意味は、「天衣無縫ともいわれる、縫い目のない衣を来た仙人はもういないのに、山の女神はどうして仙人のための白布をさらしているのでしょうか」というものである。「衣着ぬ人もなきものを」と仙人の不在をことさらに言表することで、同じ場にいた人々には、立ち縫わぬ衣をまとった仙人の飛翔する姿が鮮やかに脳裏に浮かび上がったことであろう。定家の有名な和歌「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のたまの秋の夕暮」(『新古今和歌集』)が「なかりけり」と否定しても一度喚起された花・紅葉の像は消えず、その残像的効果が寂れた一首の世界の華やぎとなっている<sup>注14</sup>のと同様の趣向である。また、詞書と歌とで形成されているのは、仙境にふさわしい「白」の世界である。仙人の天衣となるべき白布に見立



てられた「滝」、かきくらし、辺り一面を覆う「雪」、また「滝におとらず」降る涙も「白玉」として白さを強調しているよう。片桐（一九八五）はさらに、「高い空から降る雪の白さと滝の水の白さを一体化してさらにスケールを大きくし、「山姫が大きな雪を降らせていると把握し、それを「衣」に見立てている」とし、滝と雪の両者を合わせた景色全体が衣を表していると解しており、首肯される注<sup>15</sup>。このような清浄な白に覆われた仙境にあって、和歌を奉納することで仙人といわば精神の交流を果たした伊勢は、やがて和歌のうえで自らを天人のように遇するようになる。以下、この後に置かれた八の歌を見ていこう。

今は道に出でて、越部といふ所に宿りぬ。かの御寺のあはれなりしを思ひ出でて

九 みも果てず空に消えなで限りなく厭ふ憂き世に身の帰り来る

と一人ごちて、袖も絞るばかり泣き濡らしけり。

越部は奈良県吉野郡大淀町にある実在の地名だが、「越」という語が、仙境から再び境界を越え現世に戻ってくる語感も備えているだろう。それが、和歌の結句「身の帰り来る」に響き合っている。伊勢自身は、仙境であった「かの御寺」、龍門寺に強く引かれている。そうでありながら御寺を離れ、また俗世に戻ってきた自らを嘆き、歌を詠むのである。一首の意味は「寺の様子を見尽くすこともせず、我が身が果てるようなこともなく、仙人・天人のように空に消えていくこともしないで、この限りなく厭う憂き世、現世に我が身は帰ってきたことだなあ」となる。ここには、仙境に心惹かれ、現世から肉体を消滅させることをさえ願った、死への願望とそこからの復活、再生が描かれていると言ってよい。だからこそ、この歌のすぐ後に、「かかるほどに御息所の御もとより、「やがてのぼりたまひね」という温子からの強い要請が描かれ、伊勢は再び宮仕えに戻っていくのである。宮廷歌人伊勢の誕生には、若き日の挫折と、歌によってその挫折を彩り、鎮め、送る過程が必要だったのだと、この歌物語は語っている。そして「吉野」は、その死と再生に不可欠な場所として物語上で機能しているのである。

時系列は前後するが、十と十三の歌は、伊勢へ宮仕えを促す時平からの歌と、それに対する伊勢の返歌が二組並んでいる。そのうちの十二、十三は吉野にかかわる贈答であるので、「伊勢日記」の考察の最後として、この贈答を詠み解いていこう。

この男、「御心のつらければ、吉野へなむまかる」とて

十二 ひとすらにいとひはてぬるものならば吉野の山に行くへ知られじ

返歌

十三 我が宿と頼む吉野に君し入らば同じ挿頭を挿しこそはせめ

維摩会に行くとして、言ふなりけり。

時平の和歌上の句が「ひとすらにいとひはてぬるものならば」という措辞になっているのは、十番歌の「ひとぶるに思ひなわびそ」、伊勢に対して「そんなに思い詰めないでください」と呼び掛けている措辞と対応して詠まれていると取れるので、ここでも「あなたがそんなにひとすらに世を厭い、私を嫌うのでしたら」という意味だと思われる。そのうえで、あなたが私を一途に嫌い続けるなら、私は仙境である吉野山に隠れ住んでしまおう、と訴えているのである。それに対し、十三番の伊勢の歌では、「私が我が故郷と頼みに思っているあなたが吉野にいらっしゃるのでしたら、私も心を同じくする仲間として、同じ吉野山の花をかざしましょう」と返している。片桐（一九八五）はかざしを「仙人のシンボル」として、「もしあなたも吉野山にお入りになるのなら、二人いっしょに仙人になりましょうと言って、仙人などになれるはずのない時平を揶揄しているのである」としているが、首肯されよう注<sup>16</sup>。一見時平の和歌に寄り添い「同じかざし」をかざそうと呼びかけつつも、吉野を「我が宿」と頼む己れと、維摩会に行くついでに「吉野」に籠ろうなどと言いかけるあなたとは住む世界が異なる、と伊勢は言う。ちなみに、この「同じかざし」の語句は『源氏物語』でも「胡蝶」「常夏」「若菜上」「椎本」の四箇所で使用されており、いずれも同じ志を持つもの、あるいは同じ血縁を持つものとしての連帯感を強調する役割を担っている。この「同じかざし」の度重なる引用からも、紫式部の、「伊勢日記」の吉野にまつわる逸話への深い関心が窺えるだろう。

ここまで、『伊勢集』冒頭の「伊勢日記」と呼ばれる部分のうち、「吉野」に関わる記述を順に見て行き、伊勢が吉野を「仙人の住む異界の地」と位置づけていること、また、そこに心惹かれる自らをも、衣をまとうて空に飛び立つ天人として表現していることを確認した。以上の『伊勢集』理解を踏まえ、伊勢の歌に親昵しその世界観を物語に発展的に活かしていた紫式部が、「薄紫」巻の明石の君と乳母との交流をどのように描いたのかを見ていこう。

## 再び、明石の君と乳母の贈答歌

ここで、「薄雲」巻の当該場面と「伊勢日記」の吉野関連の記述の類似を見るために、先に挙げた本文を少し前の部分から再掲する。

雪かきくらし降りつもる朝、来し方行く末のこと残らず思ひつづけて、例はことに端近なる出でるなどもせぬを、汀の水など見やりて、白き衣などのなよよかななるあまた着て、ながめたる様体、頭つき、後手など、限りなき人と聞こゆともかうこそはおはすらめと人々も見る。落つる涙をかき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうち嘆きて、

雪ふかみみ山の道は晴れずともなほふみかよへあと絶えずして  
とのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心のかよふあと絶えめやは (傍線稿者)

ここでは、「伊勢日記」龍門寺での詠歌の状況との類似が見て取れるだろう。雪が「かきくらし」あたり一帯を覆い、遣水の實際にできた氷の白さを見やる明石の君も「白き衣」を多く重ね、白玉の涙を流して、雪の織り成す白の世界と一体化している。「伊勢日記」になぞらえていえば、山姫が雪と滝とでもって織り、さらした天衣を、明石の君自身が身にまとったかのである。「汀の水」は諸訳「池の水」とするものが多いが、ここは「遣水が凍り流れが滞っているところ」だと見たい。なぜなら大堰の邸の遣水は物語内でたびたび言及され、「水の流れもをかしうしなした」る様子が明石の邸を想起させるものとして機能しているからである。この遣水については、源氏みずからも「東の渡殿の下より出づる水の心ばへ繕はせたまふ」と手入れの指揮をし、遣水自身も源氏と明石の尼君の会話に参加するかのよう「繕はれたる水の音なひかごとがましう」響き、存在を主張する。そしてさらには、明石の尼君の和歌でもって「住みなれし人はかへりてたどれども清水は宿のあるじ顔なる」と、この宿の「あるじ」、中心にあるものとして位置づけられるのである（「松風」巻）。思うに、この遣水は明石との類似をもって大堰の異界

性を保証するものであり、明石の君が「水の女」として物語上機能するうえで不可欠な存在なのである。「薄雲」巻の終局部で、明石の君が篝火が光る遣水を眺め、「いさりせし影わすられぬ篝火は身のうき舟やしたひきにけん」と、改めて明石と大堰との類似性を詠み、その浦から「うき木」ののってやってきた我が身を今一度顧みていることも、この仮定を裏付ける。大堰の邸の生命線は、異界たる明石との同質性を保証する遣水なのである。とすれば、その遣水がおったという記述は、明石の君の精神的な危機を表しているのではないか。辺りは雪に覆われ、明石との通路はとだえ、また都の住人になることもできない。明石でもあり都でもある、両義性を持つ大堰は、反面明石そのものでもなく都そのものでもない。宙づりにされた明石の心は、流れを失った遣水のごとく行き場を失う。これは、「朝顔」巻で源氏との心の乖離を自覚した紫の上が、「こほりとぢ石間の水はゆきなやみそらすむ月のかげぞながる」と、現世で行き場のない自らの心を、凍って滞る遣水に重ねつつ「外を見出して」いるありようと極めて近似していよう。このような状況下で、くだんの和歌の贈答は行われる。

明石の君の歌は、「恋しくはとぶらひ来ませ」の三輪山の歌を反転させた伊勢の歌を、さらに反転させたような内容を持つ。これまで「明け暮れのもの思はしき、つれづれをもち語らひて慰め馴らひ」合ってきた乳母への連帯を求める気持ちがあるような歌を詠ませたのだろう。しかし、伊勢の歌を介して再反転させた明石の君の想いは、三輪山のような直截さを持ち得ない。雪によってかきくられた深山の雪は「晴れず」、道はとざされている。しかし、それでもその地に「踏み通う」ことがあるとするならば、その手段は「文」を通わせることによってしかなしえない、というのである。

それに対する乳母の歌は、「雪」「山」「接続助詞のへも」「かよふ」「あと絶えず」と明石の君の歌と美しい対応をなし、心の親近性が見てとれる。否、見て取れるように、明石に君にそれとわかってもらえるように、乳母が詠んだのである。明石の君の歌に見られない「たづねても」の措辞は、「恋しくはとぶらひ来ませ」および伊勢の歌の「今は訪はじ」「訪ぬる人もあらじと思へば」を引き受けたものである。三輪明神は「私が恋しいならば、この三輪の庵まで訪ねていらっしやい」と言ったが、心の離れたあの人は、もう私を訪ねてはこないだろう。その伊勢の「訪ぬる人もあらじ」の想いを強く否定するものとして、仲平の「籠るとも」ではない「訪ねても」が採られたのだと考えたい。

そして、明石の君の「ふみ(文)かよへ」に対して選ばれたのが、「心のかよふ」という措辞であった。歌の世界において、「心通ふ」という表現は、「身は通えない」という前提のもとで詠まれるものであった。「雲居にもかよふ心のおくれねばわかる」と人に見ゆばかりなり(『古今和歌集』)「思ひやる心はつねにかよへども逢坂の関こえずもあるかな」(『後撰和歌集』)「遙かなる程にもかよふ心かなさりとて人のしらぬものゆゑ」(『拾遺和歌集』)などがそれにあたる。また『伊勢集』にも、「四三三心

のみ雲居のほどに通ひつつ恋こそまされ鶴の橋」の歌があった。「心の通ふ」という言葉が選択されたとき、明石の姫君にしたがって源氏の二条院という別世界に赴く乳母には、ふたたび明石の君に会うことは、まさに仙境である吉野を訪ねるかのごとく困難であることを悟っていただろう。事実、物語に置いて、今後乳母が大堰を再訪する場面が描かれることはない。しかし、だからこそ、「文」という手段を用いて、「心」は、心だけは常に「踏み」かよい、そのあとは絶えることはない、心の連帯を強く訴えたのであろう。その後、二人の文の通い合いを具体的に描く記述はない。しかし、「若菜下」巻、明石の姫君が産んだ皇子が東宮となり、源氏が紫の上、明石一族と住吉神社に願果しの参詣を行った際、「次の御車には、明石の御方、尼君忍びて乗りたまへり。女御の御乳母、心知りにて乗りたり」と、「心」を知るものであることを理由に明石の君と同車する。住む世界を違えても、心だけは常に文によって通わせ合いますと誓った、乳母の約束は果たされたのだと、この「心知り」の語は読者に語りかけているように思われる。

ここまで、「薄雲」巻の明石の君と乳母との贈答歌が『伊勢集』冒頭の吉野を巡る歌の影響を受けて成っていること、『伊勢集』冒頭を踏まえることで、明石の君に吉野の仙境にて神仙と精神的交流をはたし、自らをも仙人・天人にたとえた伊勢の面影が重ねられ、「明石」「濔標」「松風」巻で「明石の君」天女の図式が強められていることを見て来た。ここで、冒頭の「伊勢日記」の部分ではないが、桂に下がっていた伊勢に、宇多上皇が

逢ふほどと川を隔てて経るほどは織女も何か異なる

と、伊勢と織女とを重ね合わせた歌を詠んでいることを思い合せてもよい。そもそも、『源氏物語』冒頭で長恨歌の和歌を詠んだ歌人としてその名が挙げられている伊勢は、自らが詠んだ長恨歌を題とする和歌十首を読者に想起させることで、その後物語全体を通して繰り返し描かれる「去り行く天女たち」の原像を創り上げたともいえよう。その伊勢の面影を負った明石の君も、天界の者として王権を担う源氏と結ばれ、子をなし、やがて子と離れ去り行くとうとするのである。

しかし、明石の君はその後の物語において、天に帰り去りはしない。伊勢が吉野の神仙境に惹かれつつも、嘆きながら「空に消えなで」都に戻り、宮廷歌人として、また宇多天皇に寵愛される身として復活を遂げたように、明石の君もまた最終的には六条院に迎え入れられ、入内する明石の姫君の後見役としての新たな役割を得ていく。明石の君をはじめとする女君たちが住む町

を造営する際、源氏が心を配ったのが遣水や築山の配置であった。「御方々の御願ひの心ばへ」に添い、「もとありける池山をも、便なる所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらため」た邸に、明石の君は移って来る。あらためられた遣水は、大堰と同じく、明石の「海づら」に似通った場所となったことだろう。明石の君は、異界の象徴たる遣水を見つめ続けながら、天界との回路を持ち続けたまま、源氏のいる都の世界に居場所を見出すことができたのである。明石の君をはじめ、紫の上、花散里、六条御息所の娘たる秋好中宮など、源氏の人生に深く関わる女性たちが、六条院に住まうことになるのが、「少女」巻——「少女」は、天女になぞらえられる五節舞姫を意味する——であることも興味深い。源氏にとって、六条院の造営、運営は、去り行く運命にある天女たちを留め、その加護を得ていくことにその第一義があったのではないだろうか。

最後に、この論考は、受講生の示唆に富む質問・指摘がなければ生まれ得なかったことを再度記し、謝辞としたい。本論文では、明石の君が、そして『源氏物語』の女性たちが、なぜ繰り返し天女の面影を負って物語世界を生きなければならぬのか、その「なぜ」の部分 deeply 掘り下げられなかった。今後は、各女性たちの天女イメージを形作っている典拠に着目しつつ、それぞれの天女像の共通点や違いを見ていくことで、作者が源氏を取り巻く女性たちをどのような存在として描こうとしていたのかを探っていきたい。

## 注

- 1 鈴木さやか「『明石』巻の本文解釈二題——『源氏物語』に見られる天女モチーフとの関連で——」『国際関係・比較文化研究』第17巻第1号、静岡県立大学国際関係学部、二〇一八年
- 2 明石の姫君の乳母である宣旨の娘については、小山清文（一九九一）「明石物語と〈まつ〉——宣旨の娘と中将の君をめぐる——」『武蔵野女子大学紀要』26に「端役的存在であるにもかかわらず出自や心情まで細かに語られる明石姫君の乳母、宣旨の娘の存在にあらためて注意させられる」とあるように、端役でありながら詳細に人物像が作り込まれていることについて、数多くの指摘がなされている。たとえば加藤宏文（二〇〇〇）「源氏物語、端役之力——宣旨のむすめの『女心地』——」『山口大学教育学部研究論叢 第1部 人文科学・社会科学』50は宣旨の娘の「何心もなく」源氏の言葉を受け入れる素朴さや源氏の歌への返歌の巧みさなどから、宣旨の娘の人物像を丹念に掘り下げている。また、西村恵（一九八七）「心知りの人」宣旨の娘——『源氏物語』における乳母の位置』『国文学攷』116では、「若菜下」巻で明石一族が住吉詣に出かける際、「女御の御乳母、心知りにて乗りたり」とあるのに着目し、宣旨の娘が住吉詣の本当の意味あいを心得、明石一族としてこ

の慶事に参加していると指摘する。本論文ではこれらの先行研究を踏まえ、明石の君と運命を共有し、心情的に極めて近い間柄である乳母が、姫君を手放す決意をした明石の君にいかなる思いで歌を送ったのか、また、そのように近い間柄にある乳母の眼に、明石の君がどのように映っていたのかを明らかにしていく。

3 「桐壺」巻の長恨歌の御絵における『伊勢集』の影響については、古くは『河海抄』にその指摘があり、玉上琢彌「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御」(『国語国文』一九五五)等の論考がある。

4 他の『伊勢集』の受容については、たとえば倉田実「『伊勢集』と『源氏物語』—伊勢歌の歌句引用」『大妻国文』39、二〇〇八)、贅裕子「〈紫式部〉の中の〈伊勢〉」『〈紫式部〉と王朝文芸の表現史』森話社、二〇一三)などに詳しい。

5 注4 贅(二〇一三)論文。

6 林田孝和他編『源氏物語事典』大和書房、二〇〇二年

7 田坂憲二「源氏物語の『桂の院』について」(『源氏物語の人物と構想』和泉書院、一九九三)

8 森野正弘「明石の君と歌人伊勢」(『山口国文』36号、二〇一三年)

9 折口信夫「水の女」『折口信夫全集第二巻 古代研究(民俗学篇Ⅰ)』中央公論社、一九九五年

10 高崎正秀『高崎正秀著作集 第六巻 源氏物語論』桜楓社、一九七一年

11 島内景二『源氏物語の語型学』ぺりかん社、二〇〇四年

12 河野貴美子「うき木にのる明石の君」(鈴木一雄監修『源氏物語の鑑賞と基礎知識』②総合・松風』至文堂、二〇〇二年)6に同じ。

14 田中裕他校注『新日本古典文学大系11 新古今和歌集』岩波書店、一九九二年

15 片桐洋一『恋に生き歌に生き 伊勢』新典社、一九八五年

16 15に同じ

#### 参考資料(源氏物語現代語訳、注釈書等)

- ・国文注釈全書『源氏細流抄・源氏宮職故實秘抄』室松岩雄校訂編輯、国学院大学出版部、一九〇八年
- ・日本古典文学大系15『源氏物語 二』山岸徳平校注、岩波書店、一九五八年
- ・角川文庫『源氏物語 上巻』与謝野晶子訳、(『新新訳源氏物語』初刊は一九三七—一九三九年、角川文庫版は一九七一年)

## 「薄雲」巻の乳母歌について

- ・ 『潤一郎新々訳源氏物語 巻3』 谷崎潤一郎訳、中央公論社、一九六四年、
- ・ 角川ソフィア文庫『源氏物語―付現代語訳 第四巻』 玉上琢彌訳、角川書店、一九六六年
- ・ 『源氏物語 四巻』 円地文子訳、新潮社、一九七二年
- ・ 新潮日本古典集成『源氏物語 二』 石田讓二、清水好子校注、新潮社、一九七六年
- ・ 源氏物語古注集成 第四巻『孟津抄』 九条通著、野村精一編、桜楓社、一九八〇年
- ・ 源氏物語古注集成 第八巻『妻花抄・付源氏物語聞書』 牡丹花肖柏著、伊井春樹編、一九八三年
- ・ 源氏物語古注集成 第九巻『一葉抄』 藤原正存著、井瓜康之編、桜楓社、一九八四年
- ・ 源氏物語古注積叢刊 第七巻『岷江入楚』 中野幸一編、武蔵野書院、一九八六年
- ・ 新日本古典文学大系20『源氏物語 二』 柳井滋他校注、岩波書店、一九九四年
- ・ 新編日本古典文学全集21『源氏物語②』 阿部秋生他校注、小学館、一九九五年
- ・ 『現代語訳 源氏物語 四巻』 瀬戸内寂聴訳、講談社、一九九七年
- ・ 『全訳 源氏物語 第2巻』 大塚ひかり訳、ちくま文庫、二〇〇八年
- ・ 『謹訳 源氏物語 第四巻』 林望訳、祥伝社、二〇一〇年
- ・ 『源氏物語 上』 角田光代訳、河出書房新社、二〇一七年